

# 縫子

宮本百合子

青空文庫



二階の掃除をすませ、緩<sup>ゆっ</sup>くり前かけなどをとって六畳に出て見ると、お針子はもう大抵皆来ていた。口々に、ぞんざいに師匠の娘である縫子に挨拶した。縫子は襖をしめながらちよつと上体をかがめ総体に向つて、

「お早う」

と答えた。彼女は自分の場所と定っている地袋の前に坐つた。針箱や縫いかけを入れた風呂敷つつみなど、お針子の誰かによつてちやんと座布団の前に揃えられていた。然し、直ぐに包みはとか

ず、縫子は傍でかんかんおこっている火鉢を引よせ、その上にごみかかつて手を焙った。窓際で車屋の娘のてふが小紋の綿入れの引き合いを見ていた。拡げられている縫物の様々な色、染の匂い、場所に合わせては多すぎる娘達などで明るい狭い部屋は一種柔く混雑している。

縫子が箱火鉢の縁に手頸をのせ掃除でぬれた爪あかぎれの繻帯をほどいてみると、米よねが篋台へらから頭もただけ擡もたげ大きな声で、

「先生」

と隣室に声をかけた。

「はあい」

「きのうの男物、やっぱり鍵にしておきましようか」

「それでいいでしょう」

縫子も他の娘達も気のない顔でその問答をきいた。米は暫く一心に紺花色の裏地を裁っていると思つたらいきなり、

「ねえ、ちよつとどう思つて？ 千代乃さんまた来るでしょうかと云い出した。くるりとその声でてふが振向き、

「縫子さんどう？ 昨夜の様子つたら！」

さも堪らなそうに云つた。縫子は、やはり火鉢にかぶさつたまま、嘲るように口のはたを引下げて笑いながら合点する。

「何なの」

好奇心に満ちたのは米ばかりではなかつた。

「千代乃さんがどうかしたの？」

てふが、まち針を打ちながらわざと無雑作に云った。

「昨日千代乃さんの御婚礼があつたのよ」

「あらあ」

何故だか一同がとてもおかしそうに吹き出した。

「本当？ 本当に昨夜あつたの？ いやな千代乃さん、私今度会つたらうんと云つてやるわ。こないだ会つた時訊いたらすまして来年よ、だなんて——」

「見たの？ おてふさん」

「見たわ、ねえ」

てふは、さも二人だけがあれを知つてるのよと合図するように得意で縫子に目交ぜをした。

「とても素敵だったわね」

縫子はまた、大きい瞼がちつと脹れぼつたいような眼を瞞みはつて、唇を引下げながら合点する。——この意味ありげな表情を見せられた娘達はもう我慢を失なった。

「ねちよつと！ 何なのよ、何があつたの？」

「いじわるな人！ 焦らさずにおつしやいよ、早く！ さ」

「私だつて昨夜千代乃さんの御婚礼だなんて知らなかったのよちつとも。あれ何時頃だつた？ 八時頃？ 縫子さんと二人してお湯から帰りに糸源へ廻つたのよ、丁度ほらあすこ千代乃さんちの先でしょう？ こつちへ来ると千代乃さんちの前がひどい人だからなの。何事かと思つて私ドキツとしちやつたわ全く。いそいで

縫子さんで行って見たら、それが、あんた千代乃さんの御婚礼なのよ」

「だって——表からどうしてそんなに見えたの？」

「わざと見えるように、お店をすっかり開けっぴろげてあるのよ。——千代乃さんのお母さんて、ほら——云つちや悪いけれど随分あれでしょう？　だから見て貰いたくって仕様がないのよ——ああいう処を……」

米が同情と羨望をこめて呟いた。

「千代乃さんこそいい面の皮ね」

——皆がしばらく暫時沈黙した。やがて内気で年若なのぶが、

「千代乃さん綺麗だって？」

と訊いた。

「綺麗だったわ」

「島田？」

「そうよ」

「どんな装なり? 模様？」

「そうだったわね、何あの模様——蓬菜じゃなかった？」

縫子は指先に繃帯をしながら、

「……見えなかったわ」

とぶつきら棒に返事した。本当は蓬菜だったのを知っていたが、彼女はてふが得意で喋るのがだんだんいやになり出したのであった。然してふは、

「お婿さんよかずつと立派だったわよ。お婿さん、ありやあきつと千代乃さんより小つちやいに決つてるわ」  
とがらがら云つて、皆を笑わせた。

「——でも千代乃さんもこれからは今迄のように行かないわねえ、うちの姉さん見たつてわかるわ」

米がしんみり云い出したにつれて、二十前後の娘たちはてんで嫁に行くのがいいか、養子がいいかという議論を始めた。次第に熱中し、实例を出したり、噂の又噂をしたりして盛に自分の言葉をも朋輩に信じさせようとする、興に乗った様子を縫子は火鉢のところからぼんやり眺めていた。縫子はよく何も手につかずぼんやりしていることの多い娘であつた。左の人指し指と薬指とに白

金巾のきれつ端でちよいちよいと繃帯し、小さい蝶でもついているような手を大火鉢にかざし、その甲に頬ぺたをのせて皆の方を眺めている。火氣の故で、彼女の薄皮で色白な顔が上気せうるんだようになった。それでもそうやっている。何か可哀そうっぽいところがあるので、ふと見咎めた米が、

「縫子さん、どうかして？」  
と云った。

「おや、悲観してるの？ 何か」

さも<sup>からか</sup>揶揄うように仰山なてふを睨んで縫子は徐ろに首を擡げた。彼女は、腰を反らせるとくしゃくしゃ両手で眼を<sup>こす</sup>擦りながらとつてつけもなく、

「あああ、眠くなつちやつた」

と大きな生なまあくび欠伸をした。それを見ると皆はひとときわ高く笑いこけた。縫子をごまかそうとしたのが明かだと思ふから、なおさら笑いがこみ上げて来る。縫子はあまり笑われるので自分までほんのり赧くなつてしまつた。

「おやめなさいってば——」

彼女は面倒くさそうにとんび足に坐つたまま風呂敷包の方へ小柄な紡績緋を着た体をずらし、やつと仕事に取懸つた。

縫子は、いつからとなくヒステリー娘だと思われていた。機嫌のいい時面と向つて「縫子さん、またヒステリー起しちやいけませんよ」などと出入りの細君が云つても、彼女はちつとも怒らなかつた。万事心得た年のいった娘らしく笑つて「へえ、へえ」などと冗談に紛らして答えた。自分でもヒステリーをそれなら承認しているのだろうか？ 縫子は、山科さんの娘のようなのこそ本当のヒステリーだと思つていたから、自分については拘泥しなかつた。山科さんというのは秋田の大金持で、東京に別宅があり、その借家に、縫子の親、杉村勘次郎一家が住んでいた。家賃三十四円の借家人と家主以上の関係が、母親なみが頼まれる縫物をなかだちとして生じた。山科さんの娘の名は桃代と云つた。五つ

六つの太つたいい着物を着た子であつた時分、桃代という名はどんなにか可愛らしい少女にふさわしいものであつた。今でも着物は道楽で、それ故なみが時々徹夜さえさせられるのだが、あまり愛らしい女ではなくなつて来た。桃代は二十五で、桃ちゃんと呼ばれ、家にいた。女中や下男などに気に喰わないことがあると寒中でも水をぶっかけた。秋田ではそれでも働く人に事は欠かなかつたろうが、東京では山科の家の門だけ明いている訳ではない、と皆逃げ去る。困ると、縫子を迎えに来た。下の働きをさせるより、桃代の相手役に頼まれるのであつた。年の大して違わない——縫子は二十三であつたから——話対手の他人が入ると、桃代は水をかぶせるほどの癩癩は一遍も何故か起きなかつた。おそろし

く——一緒に並んで歩くのが極りわるいほど盛装して妻三郎の活動を見に行く位のものであつた。

そういうのこそヒステリーらしいヒステリーだ。縫子は決してそんな話の種を作るようなことはなかつた。彼女はただどうかした拍子で時々云うに云われず一切合財生活の事々が詰らなくなつてくるだけであつた。生きてるのが厭といふのでもない。何がどう詰らないといふのでもない。ああその張合いないどうでもよさといつたら……。縫子は眼を開けているのさえいやで面倒になるのであつた。母親が師匠だけあつて自然手に入つた裁縫でさえ、そのような時縫子の気つけ薬には役立たなかつた。ましてあたり前な水仕事や洗濯など。——彼女は床にもぐつたきりになつ

た。そこから黙って出て来て御飯を食べて、再び布団をかぶりに戻る。

家は下が二間しかなかった。箆笥や長火鉢の置いてある四畳半に縫子が寝ていると、お針子が手水に行くにどうしてもそこを通らなければならぬ。母親や妹の登美とともにお針子達も、縫子の病気は理解していると見え、誰一人真面目に心配はしなかった。平常親しい米やてふも、いたって軽く、

「縫子さんいかが」

と通りすがりに声をかけて行くだけであつた。枕元に蹲んで話しかける者もない。変に放任されて、縫子は寝ている。彼女は侮蔑というほどでもない家じゅうの侮蔑にそうやって遠巻きにされつ

つ醒めているのか、うとうとしているのか。力が萎えて体がしやんと立たない。大儀に寝がえりを打つ時など涙が眼尻から冷たく流れ落ちた。

朝、六時半に登美が目を醒した。彼女は、

「姉さん」

と、隣りに並んで眠っている縫子を起こした。

「もう時間だよ」

縫子はひどく充血した眼を開いて陰気に寝たまま、着換えしている妹を眺めていた。

「火起してるから早く起きて頂戴」

登美は私立女学校の三年生であった。彼女が火を起し、お釜ま

でかけたのに姉はまだ起きてこない。その部屋に学用品をのせた机もあるし、登美は、

「どうしたのよう姉さん」

とふくれ声を出して催促しながら障子をあげた。また枕についたまま縫子は憤つてでもいるように妹を凝つと見、やがてあつち向になるなり夜具を引きかぶってしまった。

「――」

ちよつと呆気にとられた登美は、合点が行くと、

「仕様がないわね」

と大人らしく呟いた。

「姉さん、起きないの？ 起きないんなら母さんに起きて貰わな

くちや駄目じゃないの」

姉がうんともすんとも云わないのを見て、登美は隣室へ襖越しに叫んだ。

「母さん、起きて頂戴な。姉さん起きないんですって今朝は——」  
「おやおやそれは大変だ。——もう御飯かけましたか」

というなみのいつも穏やかな、齒の工合でも悪そうに引かかる国訛の残っている声がした。

「——また例のでしょう」

こちらへ出て来ながら、縫子の床を見下し彼女は愕おどろきもせず云った。

「——どうも二三日怪しいと思っていましたよ——顔の上気せか

たが変だったもの。——さあ登美ちゃん、髪をお結いなさい、もういいから……」

縫子が寝ついたということは、よその家庭で電球が一つこわれたという位の感情しか家じゆうに惹起さないらしかつた。商工省の小役人である父親の勘次郎は、朝食後の爪楊子を口中でころがしながら、

「どうした」

と一言云ったぎり、縫子の夜具の裾の方で洋服に着換え、いつもの通り出勤して行った。

お針子がいるしするので、杉村では御総菜などに手間をかけない風であつた。昼になみは、米よねのところから貰つた鱈の干物を焼いた。そして自分だけ先に食べ終つた。あとから、縫子が赤い細紐姿で餉台のところへ出て来た。番茶が注ぎ置きになつて瀬戸引の薬罐にあつた。彼女は飯の上からそれをかけ、干物をむしりながらお茶漬を食べはじめた。目の前は三尺の縁側、直ぐ隣家の生垣で疎らな檜葉の間から庭の一部が見えた。奇麗に箒目のついたところに赤い柿の葉が散っている。日のおいしがしそうな光線が清げな土地にさしていた。脹れぼつたい重い瞼でその日の澄んだいろを見ながら、くちやくちやくふてた食べようをしているうちに、

縫子は涙をこぼしだした。胸にしみ入るような淋しさがあつた。日の光があまり透明で晩秋らしいからだろうか。——一人でいると、心がどうかなくなってしまったような縫子にも、こういう風に自然から迫つて来るものを感じる事が出来た。彼女は何故涙がこぼれるか人に話して聞かされないと同じに、何故自分がこんなひどい無気力に圧倒されるか自分にすら説明出来ない。日のいろを眺め涙を勝手に頬へ流していると、縫子は少し楽な気分になつた。また床に入ってから眠つたものと見える。しかも随分眠つたらしい。縫子は人声で目を醒した。西日が裾の方の障子に当たっていた。お針子はもう帰つたと見え、六畳でなみと今泉という懇意な細君の低い話声がするのだ。

「ええ、そうですね……」

これは今泉の細君の元気な嗔れ声だ。

「どうしてでしょうね。同じもの食べて私や登美子なんぞちつとも何ともないのにねえ」

「——あかぎれ 靴なんかも体質によると見えますねえ」

暫く間を置いて今泉の細君が云った。

「やっぱり人はきつちり勤めでもあつた方がいいと見えますね、お出しなさるといいんですよ縫子さんも」

「実科を出たばかりのとき暫く勤めていたことがあるんですが、どうも何をしても続かないんでね、朝起きるのが辛い人だから冬なんぞとてもね」

「人間は張合いで生きていようなもんですもの、お琴でもお花でもお稽古ごとだつて習えば習つただけのことがあるんだからなさりやいいんですよ」

「——何か好きなことがありでもするといいいんですがねえ」

と述懐するような母の声がした。母は縫子を前に置いて云うことしか云つていない。縫子は床の中から他人事ひとごとのように聞いた。

すると、突然今泉の細君が大きな声で、

「なあに、今にちゃんとした方でも見付かつて身がきまれば大丈夫なおりますよ」

と云つた。その声は寝ている縫子の耳にひどく大きく響いた。

「そうだろうと思つていますけどね、何しろ」

あと急にひそひそ話になった。縫子は心持を悪くした。彼女は覚えそぼだず敬そぼだてていた耳まで夜具をかぶり、再び物もの懶うく目を瞑った。

六畳でのひそひそ話しはざつと、

「何しろ、縫子には義理がありますから、そこがね、どうも難しいんですよ。うっかりお嫁にやれば私に考えがあるようにとつて喧しい人が出て来ますし、養子して跡立てさせるとしたところが、養子は養子でまた難しいものですしねえ。財産でもあつてのことなら何ですけれど……」

という意味であつた。なみは気の平らな二度目の母親としては珍しい女であつた。彼女はただあまり平らかな気持すぎて縫子のことを話すのでさえどこやら永年世話したお針子の一人のことも

話すと同じようなところがあつた。

翌日、縫子は思いがけないきつかけで床を離れることになった。四時頃登美が学校から帰つて来た。

「あら、姉さんまだ寝てるの」

制服姿で、母親のなみに似て色こそ黒いが釣合のよい体つきで荷物を机に置いた。

「お起きなさいよもう。——どこも悪いんじゃないんじゃないの、私狭くつて困るわ」

縫子は力のない声で抗つた。

「頭が重いのに——放つといて」

云われるまでもなく姉にはそれ以上かまわず、登美は茶箆筒の

前へ蹲んだ。

「なあにかないか——おや——素敵！」

彼女は小井に一杯きんとん煮にした甘藷を発見したのであった。

「お昼に煮たの？ 姉さん沢山食べたんでしょ」

冷かしながら、登美は早速箸を持ってきた。

「ああおいしい」

如何にも好物を嬉しそうに抱え込んでいると、ガラリと格子が開いた。おやと登美が箸を止め、出て行こうとする間もなく続いて境の唐紙が一気に開かれた。

「やあ今日は、何だ、縫ちゃんどつか悪いの」

和服で立ったのは従兄の英輔であった。

「いやな英兄さん、びつくりしたわ」

登美は改めて、

「こんにちは」

と少女らしい挨拶をした。

「どうしたの、悪いの」

縫子は、鼻のところまで夜具の衿を引上げ、赧くなり、極りわるげに眼で笑った。

「頭が重いんだって」

登美が代って答えた。

「へえ、風邪？ この頃流行つてると見えるね、クラスでも閉口してる奴があつた」

そしてまた、寝ている縫子を顧みた。

「大したことないんだろ？」

縫子は合点した。

「姉さんの、気病よ」

「仮病でなくて幸だ、ハハハハハハ」

登美がお茶を出したり、それを英輔が飲んだりするのを傍で眺めると、縫子には自分の寝ているのが詰らなく感じられてきた。体がいつか軽くなった。それを無理に夜具で寝かすつけているような心持さえする。

「母さんは？」

「ちよつと買物」

「何、それ」

英輔が登美の抱えていた小井を見つけたらしい。

「何でもないわ」

「どれ——僕にもくれ給えよ」

「いや」

「変だね、何なのさ。ウワー、登美っぺ、こんなものが好きなの、驚いたね」

「平気よ」

登美は落付いてまたきんとん煮を食べだしたらしい。羽織を着、餉台に肱をつけている英輔の後つき、その横で喋ったり食べたりしている登美のふっくりした顔などまことに楽しく睦じそうに見

える。縫子は羨しい、起きたい心を抑えきれなくなって来た。彼女は、欠伸とも吐息ともつかない声を出し、布団のうちに重々しい寝がえりを打った。登美が、

「なあによその声」

と笑いだした。

「起きたらいいじゃないの姉さんたら……」

「起き給え、起き給え！ うんと遊べばそんな病気なんぞ癒っちまうよ」

#### 四

英輔の親友が小さい或る銀行の重役のようなことをしていたし、英輔自身慶大の法科に通学していたりするので、杉村の家族は彼が来るといつてもどこか家が明るくなつたように感じた。娘たちばかりでなく、なみでさえ外から帰つて来ると、

「おや珍しい」

と気さくな悦びを示した。

「悠くり出来るんでしょう？ 今日。——伯母さんはいかが相変らずですか」

彼女は布団の上に立つて帯をしめかけている縫子を見て、毒のない冗談をあげた。

「さあさあ御病人さんも寝ちやいられますまい」

まだ大儀なのだがまあ折角のお客だからという風に体を扱って  
いた縫子も、夕飯が賑やかにすみ、好きな花合せが始ると、しん  
から溢れる活気をかくす業など忘れてしまった。坐布団を真中に  
して、長火鉢の両側に父親の勘次郎となみ。登美がその次で縫子  
は英輔と隣り合わせであつた。

「おりるおりる、こんな変てこな札つかまされて出られるもんか」  
すると、縫子が、

「じゃ見て貰おうつと。ね、どうこの手——大丈夫？——仕様が  
ないでしょう」

両手に札を扇形にひらいて持ったまま膝をくずして英輔の方へ  
さし出した。

「そうねえ——このかげがありや素敵だが——」

英輔は勢よく、

「行き給え行き給え、僕がついてる」

と、持ち添えて見ていた手を離した。

「じゃ参ります」

「丁寧だね」

「いいこと？　じゃ私役があるわよ」

登美が本気になって声を張上げた。

「といち十一！」

縫子は、手の中を絶えず英輔に見せるようにしつつ、百人一首でもするような手つきで歌留多をめくった。

「姉さんと父さんとそっくりね、いやに不景気なやり方をするんだもの」

色の黒い、しかし太って皮膚の軟い勘次郎は太い眉をひくひく動しながら、

「勝てばやり方なんかどうでもいい」

と、舌たるいように云った。

「変だね僕こんな筈はないんだがな、見てくれよこれを」

英輔は碁石入の蓋にたまった借貫の南京豆をからからころがした。ヤツと、英輔が親になった。

「ようしこれで皆の財産総浚いにしてやるぞ。不見<sup>みず</sup>！」

「あらあ」

娘たちが一時に恐惶した。

「小場こうばが出る！ 小場こうばが出る！」

「なあに——シツ！ とどうだ。偉いだろう」

「何？ あら坊さん？ あら！ あら！ ずるいわ英兄さんずるいわ、そんな一度に二十もの三枚も出すなんて……」

「仕様がないうよ、天が我に幸したのさ——あ、誰でもいらつしやい、出る人は九貫、下りる人は三貫から……」

なみが本当に少しあわてたように、

「困りましたねこれはどうも。出たいようだが九貫は辛いわね」と、古風な束髪をピンで搔いた。

「じや特別八貫にまけます」

縫子は勝負の間じゆう口らしい口は利かなかつた。登美が直き嬉しがつたり悲観したりするのを姉らしく笑いながら、時々英輔に助けて貰い、また彼の札を覗き込み、遊んだ。彼女は上気せ幸福そうにあたたまつている。背中を少しかがめ体じゆうどこにも力らしい力がなくて若い婆さんのような様子が現れた。縫子は仕合わせを感じていると、多くの若い娘のように活潑に敏捷にならず、腕に力のないような、よたよた歩みをしそうなところが出来るのであつた。

十時頃。

「さあ、これでお仕舞」

と英輔が先に札を投げ出した。

「ああああ、すっかり熱中しちゃった」

勘次郎は煙草をつけ仔細らしく云った。

「やっぱりランプなんかより面白いね日本人には」

なみが、

「さあお口がせつついでいるでしょう皆さん」

と云いながら台処へ立った。

英輔は側にあつた婦人画報を見始めた。登美が一緒に覗いた。

「英兄さんどんな人がすき？」

「さあね、どれもすき」

「本当は？ あ、この人はどう」

口で冗談云いながら、英輔が眼では割合一心に見るのが縫子に

感じられた。彼女は無関心そうに南京豆を罐に戻し始めた。

「英兄さん、どんな奥さんがよくて。——ハイカラな人？」

「ハハハハ単刀直入だね登美っぺは。——田舎っぺえは御免だよ」

「英語が話せたり、ピアノが弾けなくちやいけないのね、そんなら……」

「ピアノなんかどうだっていいさ」

ぱらぱらと夥しい令嬢の写真版つきの雑誌を翻したが、英輔はふと真面目に傍に縫子のいることなど念頭のない自然さで考え深く呟いた。

「これからは女もせめて専門学校位出ていないじゃ駄目だな」

南京豆は罐の中へ落ちるたんびに喧しい音を立てていたが、縫

子はこれを聞洩すようなことはなかった。南京豆が千落ちる音よりこの眩きは大きい。――

「――姉さんたら。母さんが呼んでるじゃないの。……駄目よまたぼんやりしちゃっちゃ」

縫子は初めて気がつき、のろのろ台処へ立って行った。

縫子は明る日から再び六畳に現れ、お針子の仲間に加った。再び地袋の前に坐っている彼女を見て、もういいのと訊く者さえなかつた。

「縫子さんお早う」

「お早う……」

昼休みに米が大菩薩峠を音読して皆に聞かせた。「『まず御免なせえまし』そこへ入り込んで、どつかと胡坐あぐらをかいて黒い頭巾を投げ出したのは、なるほど裏宿の七兵衛でありました」

「ちよつと、そこに縫ちゃんいますか」

爪を剪りながら大した感興もなく、油ののつた米の声を聴いていた縫子は、小鋏を置いて襖をあけた。茶の間に行つて見ると、水口から茶色のスウエタアに洋袴ズボンをつけた勇が帰つて行つたところであつた。縫子は黙つて長火鉢の向う側に來て蹲んだ。

「困つちまうわね、山科さんところ、また一騒動したんですつて  
さ」

縫子は、灰をいじくりながら唇を歪めた。

「二三日頼みたいって云うんだけれど——どう？ どうせお裁縫も間だしするから行ってあげなさいな」

縫子はい先日、今泉の細君の義理のある家で手不足だというので頼まれ、十日もいやな思いをして手伝って来たばかりであった。

「また別なところじゃありませんか。——それにその鞆で家に入ったってお洗濯一つ出来ないんだもの。——」

「……………」

暫く黙って長火鉢に拭布をかけながら、やがてなみがいいことを思いついたというように云った。

「ああ本当に！ 今度は山科さんに何と云われても永く借しちや

置けない。——二十日に御法事があつたもの。是非その日は帰つてもらわなくちやならないから今日が——何日？　もう十六日でしょう、ほんの僅だ、行つて上げなさい」

行くとも行かぬとも返事をせず、秋日和を自分の体で堰いていくらか暗い鉄瓶のところをみつめているうちに、縫子は妙に情けない気持になつてきた。当のない暮しという思いが身に徹えて感じられた。今度はここへ行く。またあそこへ行く。そうやっていく自分に何ともいえず哀れつぽいものが感じられる。縫子は涙ぐんだ。するとなみが、お針子を憚つて低い声で、

「なんですネ」

とたしなめた。

「そんな意久地のないことでどうなります。何も涙なんぞ出すことないじゃないの」

強く云われると縫子は音も立てず一層涙をするする頬につたわらせた。なみは当惑そうにそれを見ていたが、

「どうしてそうでしょうね」

と歎息した。そして縫子の生れたままの弱い不活潑な心に霧のようにならぬかかかっている一種の生存の苦しきなどにはまるで心づかず、

「晩にでも大村さんへ行つて診てもらつて来なさい、よほどどうかしているもの」  
と勧めた。





# 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二卷」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「新潮」

1926（大正15）年11月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年1月23日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 縫子

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>